

最前線のその先へ

よもぎまんじゅう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初投稿の初心者ですが、生暖かい目で見守ってください。

# 目次

ユクモ村の独りのハンター	1
設定	3
清流を汚す異変	6

## ユクモ村の独りのハンター

今日はのどかな小春日和、勝をかすめる心地よい風、初冬にかけて寒くなつていく日々の中にもまだこんなにも温かな日がある……こんな日は少し日常から離れてみよう。

「おはようヨモギ、今日は久しぶりに暖かいよ」

「おはようございますミヤ！レイ様、直ぐに食事を作るので待つててくださいミヤ」

「うん♪よろしく」

俺のオトモ、ヨモギがキッチンに行つたのを確認して、俺は少し薄暗い部屋に入った。

「おはようトウマ、今日はすごく暖かいんだ、窓開けてもいいよな？」  
「うん、たのむよ」

トウマ……コイツは俺の幼馴染みで小さいころからよく村の外でハンターごつことかして遊んでいた、そして一緒に大人たちに怒られていた。何をやるにも一緒にモンスターハンターになるときも、ハンターになつてからも二人で狩りをして、「仲良しさん」という通り名までつけられていた。

……けど、とある事故で脚は動かなくなつちやつて、トウマはハンターを引退した。

「そういえばトウマは朝食いる？」

「そうだね、今日は食べようかな」

トウマは事故のせいで運動が出来なくて腹も張らないから、3日に3食位しか食べないけど、今日は食べてくれるみたいだ。

「ヨモギー・トウマも食べるってー！」

「はいミヤ！腕によりをかけるミヤ！」

ヨモギは狩りのサポートもすごく上手くて、尚料理もヤバイくらい上手い。さすが俺の自慢のオトモ。

「お二人共、できましたミヤ！丸鳥の金の卵と雪山のポポから取れる厳選霜降り肉を使った『ポポ玉丼』ですミヤ！」

「うおおおおお！」

俺もトウマも声を上げて喜んだ。

この・・・金に輝く卵とポポ肉から溢れる「ジユワジユワ」という音。たまんねー。

「そして、私はいつも通り、大好物の『プリリン』ミャー！」

「それでは皆さん手を合わせて」「いただきます！」「」

。  
。  
。  
。  
。  
。

朝食を食い終わって俺は一人で散歩をしに行くことにした。

「じゃあヨモギ、トウマ行ってきます」

「レイ様！一応武器を持って行くミャー！」

「分かってるって！じゃあホントに行ってくださいすー！」

俺は村長に許可をもらってユクモ村の外周を散歩することにした。

・・・と、村を出て間もなく道のど真ん中でうずくまっているガー  
グアを見つけた。

「怪我でもしたか？そんなところに丸まってるって狩っちゃうぞ・・・..  
て、え？」

俺がガーグアの影だと思っていたのは影ではなく、コイツが守って  
いた者の血液だった。

「ハンターか!?でもこんな装備見たことないし・・・」

守られていたのは、赤い髪を後ろで結って全身を血で染めた女の人  
だった。

## 設定

キャラクター設定

楠 レイ（くすのき れい）18歳 男

黒の短髪 アスター（サファイア）色の眼

見た目は青年、中身は子供基本的に穏やかな性格で熱い時は熱い。

使用武器

武器種片手剣

真ユクモノ片手剣

防具

ユクモ【天】一式

トウマと幼馴染で一緒に狩りにいく仲良しである。

トウマと二人で狩っていた、下位ハンターだった時に新種の大型モンスターと出くわしたが、生還したため上位に昇格した。現在はハンターランク4。オトモアイルくのヨモギも過去の事故の時に二人をサポートして生還したことにより村の評判はかなり良い。

月下 トウマ（つきした とうま）18歳 男

焦げ茶色の短髪だったが今は長髪（切ってない）ダークグレーの眼

穏やかな性格

使用武器

武器種大剣

真ユクモノ大剣

防具

ユクモ【天】一式

あるモンスターの攻撃で負傷して足が動かない状態になった。

レイと狩っていた下位ハンターの時、新種の大型モンスターと出くわしたが生還したため、二人とも上位ハンターに昇格。トウマはレイを庇いながら逃げて、怪我を負ったため特進で現在はハンターランク5。

ヨモギ メス

活発なメスオトモ

鈴蘭ネコロツト

ズワロ一式

レイのオトモ。料理上手。「まんじゅう」と言うと怒る。

謎の女

紅色の髪（膝あたりまでの長さ）

使用武器種太刀

防具不明

出身地不明。オトモ不在。

今後、出てくるクエストの依頼主

赤衣の男・黒衣の男・ヘルブラザーズ（赤鬼・黒鬼）・受付嬢（都市

伝説マニア、17歳）

赤衣の男 全ギルドで『紅龍ノ化身』と言われている男。

見た目 赤い目 赤黒いオールバックのロング 190

cm大柄で一人称は「俺」

防具 紅色の布ボロローブ

武器 紅刀

黒衣の男 全ギルドで『黒ノ冥府』と言われている男

見た目 両目潰れている。 黒紫のワイルドポニー 1

78cm一人称は「俺」

防具 黒色の布ボロローブ

武器 蝕黒双刃

赤鬼 実力性Gハンターでもあり、もう一つの別名『地獄の鬼

兄（きけい）』

一人称は「我」

防具 暁丸

武器 軍刀【獅子帝】

黒鬼 実力性Gハンターでもあり、もう一つの別名『地獄の鬼

弟（きだい）』

一人称は「我」

防具 暁丸

武器 隴火双刃

既存二つ名全部と特殊個体とフロンティアの極み系モンスターとオリジナル極み&二つ名モンスター

・オリジナル極みモンスター

極み爆ぜるブラキディオス

極み狂うゴア・マガラ

極み輝るバルファルク

バルファルク帯電種(星雷龍)

隻眼ディアブロス暴走種

獄淵龍グランミラオス

古代兵器 龍騎兵

フロンティアの双属性とオリジナル属性と既存属性

・オリジナル属性

麻痺&火属性(炎症)

斬属性(衝撃波)



## 清流を汚す異変

倒れていた女の人は今、村長に預けていて結構重傷らしい。村長はあの人を知っているみたいで、かなり腕の立つハンターらしいのだが、そんな人があれだけの怪我を負うのは異常だと話していた。そのことをヨモギとトウマにも話したら、顔を見合して俺に一つの噂話をした。

どうも最近、溪流当たりのモンスターがおかしいという。原因は調査中、ファンゴやジャギイやケルビがあまり姿を見せないらしい。いつもなら採取をしていると攻撃してくるのに、最近は採取中に見かけても無視してどこかに行ってしまうらしい。

「確かにそれはおかしいな・・・モンスターだけに効くウイルスとか？」  
「いや、たぶんそれはないよ。ヨモギが気になって様子を見に行っていたし、もしレイのいう通りならヨモギはとっくにやられてる。それと植物にも問題はないよ。植物を食べたガーグアの卵を俺たちは食べてるし」

「あと考えられるのは新種のモンスター・・・か」  
「こういう話はプロの専門家に話を伺うのがいいはず。」

「やつぱこういう時はアイツだな」  
「クウお嬢様ですニヤ？確かにあの人なら詳しそうですミヤ・・・レイ様、差し入れにプリリンですミヤ」

「おう！じゃあ早速行ってくるな」

「いつてらっしやい！」ですミヤ〜！」

。

俺は集会浴場にいる受付嬢のクウと話していた。コイツは噂話やら都市伝説やらが大好きでいつも変なことばかり調べているが、こういう時のコイツは素直に頼もしい。

俺はヨモギ達から聞いた噂のことと、あの人のことも一応話しておいた。

「その女の人のことは分からないけど、噂のほうなら一応知ってるよ」  
「やっぱり新種のモンスターとかなのか？」

俺が身を乗り出して聞くと、クウは辞書のようなものを取り出しパラパラとページを捲っていく。

「えつとねー…：ジンオウガぐらいの大きさの狼みたいなのモンスターが2頭、たぶんオスとメスだと思うけど、2頭で行動している。」

昼間はあまり目撃情報がなく、夜にガサガサと動く音を聴く人が多いみたい、たぶん夜行性だね。

ジンオウガみたいに発音することがないから夜に目をつけられると見えない内にガブツとやられる可能性が高い。あと物凄く速らしいよ。

小型のモンスターがハンターを攻撃してこないのはそんな暇がないほどの危機的状況だったんじゃないかな？」

「クウはなんでそんだけの情報収集能力があるのに受付なんかやってるんだ？正直頭おかしいと思うぞ」

「トウマ先輩に憧れてるんだよ、冷静で状況把握にたけていて何時もレイ先輩を助けてたじゃん？でも私はハンターになれなかったから、せめてココで皆の役に立ちたい。私が伝説や噂話にこだわるのは、ほんの些細な情報でも手に入れたいから」

「ほうほう…ふむふむ。成程、トウマにお前の気持ちを伝えておくよ」

「それより先にやることがあるでしょ！村長に今の情報を全部伝えてきなさいー！」